罪に満ちた世界に
生まれて来られたイエス様

マタイ2章13～23節
2021年12月26日
松田 基子 師

クリスマス、それは滅びる以外になかった、人類の罪の歴史に、神様の愛と憐れみによって、人類を救うために、神の御子が、人の子イエス様となって生まれてくださった日です。 真っ暗な人類の歴史に、天からの**輝く光が差し込んで来た日**です。 ルカによる福音書2章の、羊飼い達が夜通し、羊の番をしている所に、天使が近づき、主の栄光が現れた輝きは、私達の想像を絶するものであったでしょう。

ヨハネ福音書1章9節には、神の御子の出現について、

「その光は、真の光で、世に来て
すべての人を照らすのである。」

とあります。 光に照らされる、それは、これまで闇の中に隠されていたものが、明らかにされることです。 光であられる神の御子イエス様が、この世に生まれて下さったことは、また、人間の罪が顕わになることでもありました。 イエス様の誕生に依って、先ず、罪を顕わにしたのは、ユダヤの王、ヘロデ王でした。 東方の占星術の学者達が、エルサレムの都に来て、

「ユダヤ人の王としてお生まれに
なった方は、どこに居られますか。」

と問うた事は、ローマの権力を後ろ盾に、ユダヤの王として君臨してきたヘロデ王にとって、それは非常な不安材料でした。

老年になったヘロデにとって、ユダヤの王位は、最後の砦でした。 若い時は、狡猾(こうかつ)な政治手腕で、様々な名目で税収を挙げ、多くの建設事業を行い、自分の偉業を誇り、そこに自分の存在感を得ていました。 しかし、それは皆、住民の生活を犠牲にしたものでした。 彼は、住民の生活や幸せを考えることはありませんでした。

『住民は、王という、自分の為に、
働かせ、仕えさせる存在』

でしかありませんでした。 この世の王とは、そのようなものでした。 ヘロデ王は、自分は王で、

『自分の思い通りの生き方が出来る』

と思い込んでいました。 彼は10人の妻と結婚し、15人の子女を設けました。 しかし、結果は、妻や子供達による、王位継承争いから、彼らの互いの誹謗中傷の、聞き手とされ、肉親を信じる事が出来ないで、彼は最も愛したとされる、妻マリアンネと、彼女との間に生まれた2人の息子と、他の妻による、1人の息子を処刑しました。

「ヘロデの子になるより、豚になる方が
安全だ」

と言われるほど、彼は猜疑心に囚われ、多くの人を殺害しました。

ヘロデは、自分の思い通りの生き方を求めたのですが、結果は愈々(いよいよ)罪を犯し、愈々罪を深くする生き方になりました。

『メシア誕生の預言が与えられている、
ユダヤの王位に在りながら、彼は神様を
崇めず、その神様に向かって、剣を抜き、
向かって行こうとしていました。』

彼は、東方から来た、あの占星術の学者達のために、祭司長、律法学者達を呼び集めて、

『メシアの誕生預言地は、ベツレヘムである』

ことが分かると、彼らに教えました。 そして彼は、メシア殺害の目的で、学者達を偵察隊代わりにベツレヘムに送り出しました。 しかし、学者達は、王から、

『分かったら知らせに来る様に。』

と命じられたにも拘らず、何時になってもその姿を現しませんでした。

占星術の学者達は、ヘロデのもとに寄らず、既にユダヤを離れたに違いありません。 ヘロデは最初からメシアを殺すつもりでいましたが、彼はその事を誰にも教えませんでしたが、神様はヘロデの心の全てをご存知でした。 神の御子をこの世に誕生させられた神様は、御子の命を守られます。 マタイ2章13節を見ますと、

「占星術の学者たちが帰って行くと、
主の天使が夢で、ヨセフに現れて言った。

『起きて、子供とその母親を連れて、
エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、
そこにとどまっていなさい。 ヘロデが、
この子を捜し出して殺そうとしている。』」
とあります。 ヨセフは先に夢の中で、天使のお告げを聞いて、自分の人間的な考えを皆捨てて、ただ、御言葉に従い、マリアを妻に迎えると、幼子が誕生し、占星術の学者の来訪を受けたのでした。 ヨセフは神様に信頼し、神様の命令には、無条件で従うことの正しさを確信していました。

そこでヨセフは、天使の言葉に従って、夜の間に、マリアとイエス様を連れて、エジプトに向かいました。 **何故エジプトだった**のでしょうか。
エジプトは、永く列強としての力を持ち、農業、工業、商業、文化、学問などあらゆる部門で発展し、周りの国々から、多くの人々が集まりました。 パレスチナ地方からの出稼ぎも沢山いました。 しかし、イエス様のエジプト行きには、**特別の意味**がありました。 15節には、
「**それは、**
『わたしは、エジプトから
わたしの子を呼び出した。』
と主が預言者を通して言われていた
ことが実現するためであった。」
とあります。 この言葉は旧約聖書の、ホセヤ書11章1節の言葉から引用されています。
そこには、
「**まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。**
エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
わたしが彼らを呼び出したのに、彼らは
わたしから去って行き、バアルに犠牲を
ささげ、偶像に香をたいた。」
とあります。

イスラエルの歴史を振り返ると、先祖ヤコブの一族70人は飢饉を逃れて、ヨセフを頼りにエジプトに寄留しました。 400年後、その子孫は、エジプトの奴隷の身となり、虐げられていました。苦しみの中から、神様に叫び求めると、神様はアブラハムとの契約を思い返し、モーセを指導者に立てて、イスラエルの民を出エジプトさせ、奴隷の身から救出されました。 神様は、彼らを愛し、彼らをご自身の民とするために、出エジプト記の19章で、
「**宝の民、祭司の王国、聖なる国民となる。**」
との契約を結ばれました。 神様は、彼らをご自身の宝の民として、ご自身以外に、何も頼ることの出来ない、荒涼とした荒れ野の生活に導かれましたが、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって、生活環境を守り、朝毎にマナを与えて養い、神様の御言葉に従って生きる事の確かさを訓練されました。

その事をホセア書11章1節で、
「**まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。**」
と、神様は奴隷のイスラエルを愛され、エジプトから導き出し、わが子として下さった事を記しています。 人間として、こんなに大きな祝福はありません。 しかし、人間とは、何と分を弁えず、我がままで、神様を信頼せず、造り主である神様に、不平不満ばかり言うのでしょうか。人間の罪深さがそこにあります。 彼らの荒れ野の40年の生活は、呟きの連続でした。 あの、シナイ山麓で、
「**神様の宝の民となる**」
との契約を結んで直ぐに、モーセはシナイ山頂に、律法を授かりに行きました。 でも、なかなか帰って来ませんでした。 民は、神様に信頼しないで、不安になり、金の子牛を造って、これに平伏したのです。 その心は変わらず、約束の地、カナンに導かれ、そこに落ち着いてからも、土地の豊穣神、バールに心を寄せて、神様の怒りを買いました。 この様な、神様に対する不信と自己中心は、イスラエル人に限らず、すべての人間が持っている罪の心です。これが私達人間の姿です。

そのような人間を救うために、イエス様はこの世界に生まれて下さいましたが、生まれられたその時から、**人間の罪**を引き受け、これを**贖われる**、その**一事に徹して**生きられました。
マタイはそのイエス様が、**エジプトに降られた**ことに、大きな**意味を見出し**ていました。
神の御子は、

『人類の罪の贖い、その一事を全うなさる』
ために人の子となられたのです。 その務めは、赤子としてこの地上に誕生された、**その時から、直ぐに負われ**ました。 出エジプトをしたイスラエルは、荒れ野放浪生活に於いて、神様に信頼せず、

『不平不満、呟きの連続』
でした。 その自己中心の考えから、抜け出す事は出来ませんでした。

それは、全ての人間に共通する所です。
私達も、その情況に置かれたならば、どれ程呟き、神様を疑う事でしょうか。 イエス様はそれらの罪を全て引き受けて下さるお方として、先祖はエジプトに下り、神様から呼び出されてカナンの地に戻って来たのです。 **その間**、神様に対して、**罪を犯し続けて来た**道を、イエス様は**もう一度踏み直し**て**罪を贖って下さる証詞となさる**のです。 そのイエス様が、殺されては、人類の贖いは出来なくなります。その為、神様は、ヨセフを夜の夢で起こされました。 彼は、神様をただ信じ、全信頼して、即座に従ったのでした。

一方それに対抗するかの如く、ヘロデは更に大きな罪を犯しました。 16節を見ますと、

「**さて、ヘロデは、占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。**」

とあります。 神様を畏れず、罪の奴隷となっている自分に、振り回されている人間が犯す、最も**大きな罪**は、神様への挑戦であり、それは神様が、**最も愛して**おられる存在を**殺す**ことです。
神様は、やがてご自身の最も愛する独り子を人間の罪によって殺されるのです。 イエス様は極悪人のためにも、全ての人の罪を負って死なれるのです。

罪に支配されたヘロデは、罪の無い幼子を、自分の王位保身のために殺させたのでした。
突然何の理由も分からず、母親の胸から幼子が奪われ、殺されるという、残虐極まりない行為が起こりました。人間の罪の重さ、深さ、救いようの無い罪の奴隷の姿がそこにあります。 マタイはその母親の悲しみを、エレミヤの言葉で表しました。 18節に、

「**ラマで声が聞こえた。 激しく嘆き悲しむ声だ。 ラケルは子供たちのことで泣き、慰めてもらおうともしない。 子供たちがもう居ないから。**」

とあります。 ラケルはヤコブの妻です。 ヤコブは叔父ラバンのもとで財を成して、カナンに帰って来ましたが、妻ラケルは、もうすぐ故郷に辿り着くと言う所で産気づき、そのお産は重く、彼女はベニアミンを生んで、命を落としました。
ヤコブは彼女を、ベツレヘムへ向かう道の側らに葬りました。 時は流れ、バビロニアに滅ぼされたユダ王国は、バビロン捕囚に遭い、人々は連れ去られました。 その時彼らは、エルサレムを出発して、北に8キロ進み、ラマを通って、バビロンに連れて行かれました。

その時の情況を預言者エレミヤは、
エレミヤ書31章15節で、

「**主はこう言われる。 ラマで声が聞こえる、苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。 ラケルが息子たちのために泣いている。 彼女は慰めを拒む、息子たちはもういないのだから。**」

と、母親が、息子達を奪われた悲しみ、その姿を記しています。 マタイは、またしても、ラケルの悲しみ、つまり、母親の悲しみが、起こった事を記しています。 罪の世界、それは、**罪の無い者**を、**悲しみに**追い込んで行く**世界です**。

そのような救い様のない、人間の罪を、
イエス様は一身に負って、身代わりの十字架に架かって人間に救いの道を開いて下さるのです。
暴虐なヘロデ大王は、紀元前4年に、重い病に罹り死にました。 19節に、

「**ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。**
『起きて、子どもとその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。 この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。』」

とあります。

ヨセフは、その導きに従って、イエス様と、母マリアを連れて、イスラエルの地に帰って来ました。 そのイスラエルではヘロデ大王が死ぬと、息子たち3人は、それぞれ、ローマの元老院に自分の王位継承権を主張しました。 そのため、ローマは、ユダヤ全土を、3分割にして、彼らには王位を与えず、領主の地位に留めました。エルサレムを中心とする狭い意味でのユダヤは、アルケラオが支配しました。 彼は残虐で横暴であったために、10年でその地位を奪われ、その後、領地は、ローマの直轄領となりました。ヨセフは、アルケラオの横暴の噂を聞いたのでしょう、危険を感じていると夢でお告げがあり、外国と接するガリラヤ地方、ナザレに落ち着きました。 マタイは、このことにも、神様の心を読み取って、23節に、

「**『彼はナザレの人と呼ばれる。』**
と、預言者たちを通して言われていた
ことが実現するためであった。」

と、記しています。

エルサレムを神の都として、そのエルサレムに住んで、自分たちこそ神様に選ばれた、信仰の指導者だと自負している人々にとって、ガリラヤは、外国と接している事で、宗教的汚れに染みやすい地という意味を込めて、異邦人のガリラヤと呼んで軽蔑しました。 イエス様がガリラヤで、宣教に立たれ、多くの人々が、イエス様のもとに集まり、イエス様が噂される様になりますと、彼らは、

「**ナザレから何のよきものが出ようか。**」

と非難し、イエス様を、

「**ナザレのイエス**」

と呼んで、軽蔑したのでした。 イエス様は神の子であられるのに、人間は皆、人間の考えで、この世の秤りで、イエス様を計って、イエス様を尊びませんでした。 それが罪深い人間の姿でした。

イエス様は罪に満ちた世界、罪深い人間の歴史の直中に生まれて来られました。 人間の神様に対する、不遜、傲慢、不信、また、人間同士が奪い合い、争い合い、憎しみ、怒り、傷付け、罪の応酬にうごめく、人間の世界の直中に生まれて来られ、その罪を受けながら、成長されたのでした。 イエス様が、罪に満ちた世界の直中に生まれて下さった事は、そのような**人間の現実**の全てを、**イエス様が引き受けて**下さると言う、**証である**と共に、そのような**罪を犯して生きてしまう、人間の弱さ**を知って、ご自身による、救いの**慰め**を、**与えて**くださる為でした。

神様の愛、イエス様の愛は、私達罪人には測り難く、大きなものです。 その大きな愛に、心から感謝し、神様の**救いの御手に縋って**行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

御子イエス様を十字架に着けてしまう程
罪深い私達人間の為に、
この様な私達を救うために、御子イエス様を
罪に満ちたこの世界にお遣わし下さり、
イエス様はその全ての罪を引き受け、
身代わりの十字架に架かり、私達に救いを
与えて下さったことを、感謝致します。

この絶大な恵を寸分疑わず、一途に主に信頼して生きる者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈り致します。

アーメン。